

2012 年度博士学位論文(要旨)

女性勤労者の精神的健康に関する研究

—女性役割ストレスと対処の影響についての検討—

桜美林大学大学院 国際学研究科 環太平洋地域文化専攻

柴田 恵子

目次

第1章 序論

第1節 本研究の意義

- 第1項 女性勤労者の現状・・・・・・・・・・・・・・・・・・1-4
- 第2項 本研究の意義・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

第2節 研究の背景

- 第1項 女性勤労者が経験するストレス研究とその問題・・・・・・・・6-18
- 第2項 心理的ストレスモデル・・・・・・・・・・・・・・・・・・19-21
- 第3項 女性勤労者が経験するストレスへの対処・・・・・・・・22-27
- 第4項 女性勤労者のストレスに対する影響要因・・・・・・・・28-29

第2章 研究の目的と意義

- 第1節 本研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・30-31
- 第2節 本研究の意義・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
- 第3節 本研究の構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・33-34

第3章 女性ゆえのネガティブな経験についての女性勤労者の認知（予備研究）

- 第1節 本章の問題と目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
- 第2節 女性ゆえのネガティブな経験についての女性勤労者の認知
 - 第1項 研究方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
 - 第2項 研究結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・37-39
 - 第3項 本章の考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・40-44
 - 第4項 用語の定義・・・・・・・・・・・・・・・・・・45-46

第4章 女性勤労者の女性役割ストレス尺度作成と信頼性、妥当性の検討（研究1）

- 第1節 本章の問題と目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
- 第2節 女性役割ストレス尺度作成と信頼性、妥当性の検討
 - 第1項 予備調査（研究1-1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・48-51
 - 第2項 女性役割ストレス尺度作成と信頼性の検討（研究1-2）（研究1-3）・・・・52-60
 - 第3項 女性役割ストレス尺度の妥当性の検討（研究1-4）・・・・60-66
- 第3節 本章の考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・67-70

第5章 女性勤労者の女性役割ストレスコーピング尺度作成と信頼性、妥当性の検討（研究2）

- 第1節 本章の問題と目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・71-72
- 第2節 女性役割ストレスコーピング尺度作成と信頼性、妥当性の検討
 - 第1項 予備調査（研究2-1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・73-77
 - 第2項 女性役割ストレスコーピング尺度作成と信頼性の検討（研究2-2）（研究2-3）・・78-86
 - 第3項 女性役割ストレスコーピング尺度の妥当性の検討（研究2-4）・・・・87-94
- 第4節 本章の考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・95-98

第6章 女性勤労者の女性役割ストレスモデルの検証 (研究3)	
第1節 本章の問題と目的	99
第2節 女性役割ストレスモデルの検証	
第1項 調査方法	100-101
第2項 調査結果	102-107
第3節 本章の考察	108-110
第7章 女性勤労者の属性からみた女性役割ストレスモデルの検討 (研究4)	
第1節 本章の問題と目的	111
第2節 女性勤労者の属性からみた女性役割ストレスモデルの検討	
第1項 雇用形態による女性役割ストレスサー得点	
女性役割ストレスコーピング得点の差の検討	112-116
第2項 職位別による女性役割ストレスサー得点	
女性役割ストレスコーピング得点の差の検討	117-130
第3項 職位別による女性役割ストレスコーピングが精神的健康におよぼす影響の検討	131-132
第4項 18歳以下の末子の年齢、配偶者の有無、職位による女性役割ストレスサー得点	
女性役割ストレスコーピング得点の差の検討	132-137
第5項 本章の結果のまとめ	138-140
第3節 本章の考察	141-145
第8章 総合考察	
第1節 本研究の結果の要約	146-148
第2節 本研究の総合考察	149-155
結論	156-157
謝辞	158
引用文献	159-179
APPENDIX	i-vii

要旨

第1章・第2章 序論・本研究の目的

1. 序論

総務省統計局「労働力調査」によると、女性の労働人口は上昇し（厚生労働省雇用均等・児童家庭局,2009）、女性の平均勤続年数も長くなっている（厚生労働省,2010）。また、18~34歳の未婚女性が理想とするライフコースは継続就業を理想とする割合は上昇している。一方、専業主婦コースは減少しており、女性の就業意識は高まってきている（厚生労働省雇用均等・児童家庭局,2004）。さらに、男女雇用機会均等法施行、育児休業法、少子化対策を通じて、女性が結婚・出産しても雇用継続できるための支援策の拡大が進められている。これらのことから、今後も女性が就労し、男性同様の就労形態で働く女性は一層増えるものと予測される。しかし、男性に比べ女性勤労者は、管理職の女性の占める割合や給与水準も低い。また、女性勤労者は時間雇用労働者やパート、派遣労働者など非正規雇用者の割合が高くなっている。このような雇用形態の多様化に伴い、正規社員に比べて健康管理サービスが十分に受けられない女性勤労者が今後も増えることが予測されている。以上のように今後も就労する女性は一層増えるものと予測される一方、女性勤労者の雇用状況には数多くの取り巻く課題があげられる。

女性勤労者を取り巻く課題には雇用に関するもののほか、女性に特有の健康課題、女性が就労することで生じる健康課題、男性よりも女性に多いとされる健康課題などの健康課題があげられる。女性特有の健康課題には、月経関連疾患（星野,2004）、妊娠・出産、更年期障害に伴う体調不良、疾患や自己免疫性疾患（全身性エリテマトーデス）、甲状腺疾患、偏頭痛、膝関節症などが報告されている（天野,2008；荒木,2007）。また、女性が男性よりもストレス反応が高く、抑うつ的でうつ病のリスクが高いことが報告され（Aneshensel, 1992；Cyronowski・Frank, 2000；Kessler, 2000；Mirowsky・Ross, 1995；Piccinelli・Wilkinson, 2000）、うつ病は男性より女性のほうが1.7倍の患者数である（厚生労働省,2007）。就労することで生じる健康課題には、頸肩腕障害や腰痛などの作業労働関連筋骨格疾患があげられ、その罹患率は男性よりも女性に高いことが報告されている（北原, 2007；厚生労働省, 2007）による）。また、仕事によるストレスを感じている女性の割合は74.6%で、同じ職場で働く男性の68.7%よりやや高い（日本能率協会総合研究所, 2008；下開, 2006；下開, 2008）。このように、健康課題には男女差があり女性勤労者は、ストレスを抱えながら就労していることが伺える。

これまで女性が勤務する職場は限定的で、年齢層も比較的限られていたた

め、職場の健康管理において、女性勤労者に対する対応が積極的に議論されてこなかった。しかし、女性の職域は広がり、男性同様の雇用形態で働く女性は一層増えるものと予測され、女性と男性の健康課題からみた差を考慮した、女性勤労者に対する健康管理のあり方の検討が期待されている（森，2001；森，2004；佐藤・久米，1997）。

2. 先行研究のレビュー

1970年から2009年までの女性勤労者のストレス研究を概観すると、女性勤労者が経験するストレスには、職場生活に関するストレス、仕事と家庭の多重役割間関係、性役割意識などがもとになっているストレスに大分された。職場生活に関するストレスには、男性と同様のワークストレスと女性特有のワークストレス（平島，1997；小阪・柏木，2007）やキャリア・ストレスといった（金井，1993）、職場で経験するストレスがあげられた。仕事と家庭の多重役割間関係には、仕事と家庭の多重役割数や負担（Biemat・Wortman，1991；Hammer・Allen・Grigsby，1997；菊澤，2001；Thoits，1986）、スピルオーバー（spillover）、仕事と家庭の葛藤（work family conflict）（土肥・広沢・田中，1990；濱田，2005；小泉，1997）があげられた。性役割意識などがもとになっているストレスには性役割葛藤（金井・若林，1998；金井，2002）、ジェンダー・タイプ（土肥・廣川，2004）、ジェンダー・ストレス（平田・平野（小原）・加来・豊福，2004）があげられた。

職場生活に関するストレス、仕事と家庭の多重役割間関係、性役割意識などがもとになっているストレスのいずれも、職場、家庭、日常生活の場面において、女性勤労者が経験するストレスとなりうるということが伺えた。また、女性格差、環境からの圧力、要求や義務感、葛藤、ズレ、期待に応えようとする、期待されていると認識することがストレスと捉えられ、緊張や抑うつなどといったネガティブな精神的健康との関連があることも明らかにされている。以上のことから女性勤労者を対象としたストレス研究における女性勤労者が経験するストレスは、女性ゆえのネガティブな経験が大きく影響すると考えられる。女性ゆえのネガティブな経験と緊張や抑うつなどといったネガティブな精神的健康との関連の研究は報告されているが、女性がストレスを生じた際にどのような対処をとり、その対処はどのようにネガティブな精神的健康を低減させるのかといった、精神的健康に影響をおよぼす過程を検討した研究はみあたらない。

これらを踏まえたうえで、本研究においては、女性勤労者が女性ゆえのネガティブな経験が、女性勤労者の精神的健康にどのように影響するのか、女性がストレスにどのような対処方法をとり、その対処方法はどのように

ネガティブな精神的健康を低減させるのかといった、精神的健康に影響をおよぼす過程の検討を行うことを目的とした。

第3章 女性ゆえのネガティブな経験についての女性勤労者の認知(予備研究)

予備研究では、女性勤労者が女性ゆえのネガティブな経験についてどのように認知を男性との比較で明らかにすることを目的とした。勤労者 103 名(男性 36 名 平均年齢 32.14 歳、女性 67 名 平均年齢 33.07 歳)を対象に自由記述による調査を行なった。自由記述から得られたデータを男女別に分類・整理した結果、女性ゆえのネガティブな経験は「女性特有の心身の変化」、「女性役割規範の期待」、「仕事の不公平感」、「身体的な外見」、「家庭役割の期待」、「同性との対人関係」であった。これらは、性別役割分業、性役割意識、生殖機能にもとづくものであり、また、「仕事の不公平感」は職場生活、「家庭役割の期待」は家庭生活、「女性規範の期待」、「身体的外見」「同性との対人関係」、「女性特有の心身の変化」は日常生活面で構成されている事が明らかにされた。

女性勤労者が女性ゆえのネガティブな経験のなか、性別役割分業、性役割意識やそれらがもとになっている「仕事の不公平感」、「家庭役割の期待」、「女性規範の期待」は、従来からの性役割研究で定義されている内容であることから「女性役割」と捉えられた。女性勤労者が職場、家庭、日常生活において女性役割を負担やネガティブに感じることから生じるストレスを本研究では操作的に女性役割ストレスと定義した。

第4章 女性勤労者の女性役割ストレス尺度作成と信頼性、妥当性の検討 (研究1)

研究1では、女性役割ストレスを測定する尺度を作成し、信頼性・妥当性の検討を目的とした。項目収集のため女性勤労者 115 名(平均年齢は 34.46 歳)を対象者に自由記述による調査を行い、その結果 233 件がデータとして得られ、項目を整理・検討し計 30 項目を原項目とした。30 項目を用いて女性勤労者 542 名(平均年齢 34.66 歳)を対象者に探索的因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。その結果「第1因子：職場での女性役割 4 項目、 α 係数=.856」「第2因子：日常的な女性役割 4 項目、 α 係数=.811」「第3因子：家庭での女性役割 4 項目、 α 係数=.779」3 因子 12 項目が抽出された。再検査による信頼性の検討のため女性勤労者 115 名(平均年齢は 34.02 歳)を対象者に検討した結果、再検査信頼性係数は、職場での女性役割は $r = .698$ ($p < .01$)、日常的な女性役割は $r = .824$ ($p < .01$)、家庭での女性役割は $r = .775$ ($p < .01$)、女性役割ストレス尺度全体 $r = .797$

($p<.01$) と正の有意な相関がみられた。妥当性の検討は平等主義的性役割態度スケール短縮版 (Construction of a short-form of the scale of egalitarian sex role attitudes : SESRA-S) との相関係数と確証的因子分析で検討した。平等主義的性役割態度スケール短縮版 (Construction of a short-form of the scale of egalitarian sex role attitudes : SESRA-S) と有意な相関がみられた ($r=.339\sim r=.462, p<.01$)。また、探索的因子分析で選定された 3 因子 12 項目に基づき、探索的因子分析の対象者と異なる女性勤労者 549 名 (平均年齢は 34.27 歳) を対象者に確証的因子分析を行った結果、高い適合度が得られ (GFI=.926、AGFI=.895、CFI=.927、RMSEA=.082)、女性役割ストレス尺度は信頼性および妥当性の有した尺度であることが確認された。

第 5 章 女性勤労者の女性役割ストレスコーピング尺度作成と信頼性、妥当性の検討 (研究 2)

研究 2 では、女性が経験する女性役割ストレスに対する女性役割ストレスコーピングを測定する尺度を作成し、信頼性・妥当性の検討を目的とした (研究 2 は研究 1 と同様の対象者であった)。項目収集のため自由記述による調査を行った結果 238 件がデータとして得られ、項目を整理・検討し計 30 項目を原項目とした。30 項目を用いて探索的因子分析 (主因子法、プロマックス回転) を行った結果、「第 1 因子 : 受容的コーピング 4 項目、 α 係数=.771」「第 2 因子 : 回避的コーピング 4 項目、 α 係数=.761」「第 3 因子 : 主張的コーピング 4 項目、 α 係数=.696」3 因子 12 項目が抽出された。再検査信頼性係数は、受容的コーピングは $r = .601$ ($p<.01$)、日常的な女性役割は $r = .604$ ($p<.01$)、家庭での女性役割は $r = .618$ ($p<.01$)、女性役割ストレスコーピング尺度全体は $r = .608$ ($p<.01$) と正の有意な相関がみられた。妥当性は Tri-axial Coping Scale 24 (TAC-24)、対人葛藤方略スタイル尺度 (Handling Interpersonal Conflict Inventory) との相関係数と確証的因子分析で検討した。女性役割ストレスコーピングと Tri-axial Coping Scale 24 (TAC-24)、対人葛藤方略スタイル尺度 (Handling Interpersonal Conflict Inventory) には有意な相関がみられた。また、探索的因子分析で選定された 3 因子 12 項目に基づき、探索的因子分析の対象者と異なる対象者に確証的因子分析を行った結果、高い適合度が得られ (GFI=.949、AGFI=.907、CFI=.903、RMSEA=.075)、女性役割ストレスコーピング尺度は信頼性および妥当性の有した尺度であることが確認された。

第 6 章 女性勤労者の女性役割ストレスモデルの検証(研究 3)

研究 3 では、女性役割ストレスは精神的健康にどのように影響しているのか、また、女性勤労者はどのように対処しているのか、その対処方法は精神的健康にどのように影響しているのかを Lazarus・Folkman, 1984 本明・春木・織田 訳, 1991 の心理的ストレスモデルを基にした女性役割ストレスモデルの検証を目的とした。女性勤労者 1993 名(平均年齢は 39.68 歳)を対象者に検討を行った。女性役割ストレスを潜在変数、女性役割ストレスコーピングの下位尺度における「受容的コーピング」、「回避的コーピング」、「主張的コーピング」とポジティブおよびネガティブな精神的健康を観測変数として最尤法による共分散構造分析を行った。また、女性役割ストレスの下位尺度における「職場での女性役割」、「日常的な女性役割」、「家庭での女性役割」とポジティブな精神的健康には有意な相関はみられなかったため、女性役割ストレスが精神的健康への直接影響の検討には、ネガティブな精神的健康のみで検討された。その結果、最尤法による共分散構造分析の結果、モデルの適合度は、GFI=.998、AGFI=.993、CFI=.999、RMSEA=.017 を示し、モデルの適合度はいずれも良好であった。

また、女性役割ストレスが女性役割ストレスコーピングを媒介し、「受容的コーピング」はネガティブな精神的健康に有意な負の影響をおよぼし、さらに、ポジティブな精神的健康には有意な正の影響をおよぼしていた。「回避的コーピング」はネガティブな精神的健康有意に正の影響をおよぼし、「主張的なコーピング」はネガティブな精神的健康には有意な正の影響をおよぼすとともに、ポジティブな精神的健康も有意な正の影響をおよぼしていることが明らかとなった。「受容的コーピング」と「回避的コーピング」の精神的健康への影響は、これまでのストレスコーピング研究と同様の結果であったが、「主張的コーピング」に関してはネガティブおよびポジティブな精神的健康に影響をおよぼしていた。このことは、「主張的コーピング」を行使することで生じる無効性と有効性が関連していると考えられ、今後の課題とされた。

第7章 女性勤労者の属性からみた女性役割ストレスモデルの検討(研究4)

研究4では、女性役割ストレスおよび女性役割ストレスコーピングの程度が女性勤労者の年齢、婚姻状況、雇用形態、職位の違いにより差がみられるのかを明らかにすることと女性役割ストレスコーピングが精神的健康におよぼす影響を職位別に検討することを目的とした。

女性役割ストレスおよび女性役割コーピング行使には、女性勤労者の雇用形態の違いにより差があることが示された。そのため、正規職員を対象者とし職位、年齢、婚姻状況の違いによる女性役割ストレスや女性役割コーピング行使の差の検討を行った。その結果、職位による女性役割ストレスおよび女性役割ストレスコーピング行使に差があることが明らかにされた。また、女性役割ストレスは一般職、管理職ともに婚姻状況により差がみられていた。また、女性役割ストレスコーピング行使は管理職の30歳代は20、40、50歳代より得点が低いこと、つまり他の年代よりも女性役割ストレスへのコーピングを行使していないことが明らかにされた。さらに、女性役割ストレスコーピングが精神的健康におよぼす影響の検討では、特に、主張的コーピングは一般職においてポジティブな精神的健康には有意な正の影響をおよぼすがネガティブな精神的健康には有意な影響はおよぼしていなかった。一方、管理職はネガティブな精神的健康には有意な正の影響をおよぼしていたが、ポジティブな精神的健康には有意な影響はおよぼしておらず、職位によりポジティブ、ネガティブな精神的健康への影響は異なっていた。これらのことから、女性役割ストレスコーピングへの介入により精神的健康に正の影響を与える効果をもたらす支援の可能性が示唆された。その際に職位や属性に考慮した介入案の提示が必要であることが本結果から読み取ることが出来、今後の有効な支援の実践のための貴重な資料といえる。

女性役割ストレスの程度および女性役割ストレスコーピングの行使の程度には、女性勤労者が家庭で担う役割の数やその役割の負担感が影響すると考え、18歳以下の末子の年齢、配偶者の有無、職位による得点の差の検討を行った。その結果、18歳以下の末子の年齢、配偶者の有無、職位は女性役割ストレスの程度および女性役割ストレスコーピングの行使の程度に影響していない事が明らかにされた。女性勤労者が家庭で担う役割の数やその役割の負担感が女性役割ストレスの程度に影響していなかったことは、役割負担感だけでなく女性勤労者へのサポートが大きく影響していることも考えられ、この点について今後の課題が残された。

第 8 章 総合考察

本研究は、女性勤労者が就労することで生じるストレスを職場、家庭、日常生活において経験する「女性ゆえのネガティブな経験」に焦点をあて、女性勤労者が健康に就労するための対処方法について検討した。

研究 1 で作成された女性役割ストレス尺度の項目は、変化しつつある性役割意識ではあるがいまだに根強くあることから、家庭生活では男性との性役割意識への認識の差や職場においては男女の地位の不平等感が背景にあり構成されたと考えられる。女性勤労者が経験する性役割意識がもとになっている女性役割ストレスを軽減するには、男女平等な社会の実現が必要である。男女平等な社会の実現には法制度の整備とともに、女性勤労者を取り巻く社会や個人の性役割意識、家事・育児・介護等の家庭内役割は本来男女共に担うべきものという意識の積極的な啓発を継続することが望まれている（彭・佐藤・福渡，2001）。また、「女性役割ストレス」の程度は雇用形態、職位より差がみられていたことから、立場の違いを踏まえた対策を考慮することも必要である。さらに、過重労働や待遇に恵まれない女性勤労者についての対策を今後、検討することが重要である（井上・矢野，2010）。これらの視点からの知見は、女性勤労者の精神的な健康にとどまらず、企業側の働く女性に対する理解を深めることにもつながり、それに基づいた施策を講じることも可能になると考えられる。

一方、女性役割ストレスに女性勤労者自身に取り組む対処方法に、心理的ストレス反応の低減・緩和要因として、特に重要とされているコーピング（小杉，1998；小杉他，2004；田中，2009）、つまり、女性役割ストレスコーピングを柔軟に活用できるようなストレスコーピング能力が向上されるようなストレスコーピングへの介入が必要と考えられた。そこで、本研究では、女性役割ストレスコーピング尺度を作成し、ストレスコーピングの個人へのアプローチの可能性を女性役割ストレスモデルの検証から検討した。その結果、受容的コーピングを行使することでポジティブな精神的健康を促進し、ネガティブな精神的健康を低減する。回避的コーピングを行使することで、ネガティブな精神的健康を促進する。主張的コーピングを行使することで、ポジティブな精神的健康を促進するとともにネガティブな精神的健康を促進することが明らかとなった。今後は、本研究で示唆された女性役割コーピングの精神的健康への影響から考えられる、女性役割コーピングの行使への方略の有用性や女性役割コーピングが精神的健康に影響をおよぼす要因を縦断的な調査により検討する必要がある。これらの知見を検討することで、女性勤労者の女性役割ストレスのみならず、女性の精神的な健康への支援介入プログラムの提案・実施が望まれる。

また、本研究で作成された女性役割ストレス尺度は、男性といった特定の人ではなく、女性勤労者の周囲の人との対人関係からのストレスである。職場では女性同士、家庭では母娘間、嫁姑間での「女性らしさ」の有りように始まり、子育て・子の教育・仕事に対する態度のとり方など広範囲に、同世代、世代間のギャップによるきしみが認められ、また、その個人差は大きい（加茂, 2004）。このような女性間の状況が背景にあり、本研究で作成された女性役割ストレスコーピングには、他者に依存する、他者にサポートを求めるといった内容が女性役割ストレスコーピング尺度の項目に抽出されなかったと考えられる。

しかし、これまでの職業性ストレス研究においてソーシャル・サポートがコーピング資源と機能し、コーピング方略の選定、コーピング努力の維持、コーピング方略の効果に影響をおよぼしていると考えられている。ソーシャル・サポートが豊富な人ほど、問題焦点型、積極的なコーピング方略を選定することが報告されている（Schreurs・Ridder, 1997; Specter, 2002）。女性役割ストレスモデルにおいてもソーシャル・サポートが心理的ストレスになんらかの影響が示されることが推測され、今後、ソーシャル・サポートという視点からも検討することは、個人へのメンタルヘルス介入プログラム提案の可能性が広がると考えられる。

本研究では、女性勤労者の精神的な健康状態を女性役割ストレスモデルによって捉え、周囲から女性役割を期待されることに起因する女性役割ストレスとそれらへのコーピングとの相互作用の結果として、ネガティブな精神的健康状態が生起すると考え、女性役割ストレスモデルの検討を行った。その結果、女性役割ストレス低減への介入プログラムの基礎資料として用いることが出来る可能性が得られ、意義あるものといえる。

今後は、女性勤労者の雇用形態および職位、女性と男性の健康課題からみた性差を考慮したメンタルヘルスへの支援プログラムを提案・実施することで女性勤労者に対するメンタルヘルスの健康管理が期待される。

引用文献

- Allen, T., Heest, D., Bruck, C., & Sutton, M (2000). Consequences associated with work-to-family conflict; A review and agenda for future research . *Journal of Occupational Health Psychology* , 5 , 278-308.
- 天野恵子(2008). 女性のライフステージと健康課題 , へるすあっぷ, 21 (283), 8-11.
- Amirkhan, J.H. (1990). A factor analytically derived measure of coping: The Coping Strategy Indicator. *Journal of Personality and Social Psychology* 59 1066-1074.
- Aneshensel, Carol. (1992). "Social Stress : Theory and Research" *Annual Review of Sociology*, 18, 15-38.
- 荒木 葉子 (2007). 働く女性の健康問題 女性労働研究, (51), 82-89.
- 東 清和・小倉 千賀子(1994) . 性役割の心理, 大日本図書, 143-157.
- Cyronowski .J.M, Frank. E, Young, E & Shear .K (2000). Adolescent onset of the gender difference in rates of major depression; A theoretical model. *Archives of General Psychiatry*, 57 21-5727.
- 土肥伊都子・広沢俊宗・田中國夫(1990). 多重な役割従事に関する研究 : 役割従事タイプ、達成感と男性性、女性性の効果, *社会心理学研究* , 5(2), 137-145.
- 土肥伊都子 (2009). ジェンダー・パーソナリティが心理的ディストレスに及ぼす影響 : 多重役割としてのリーダー経験に注目して, *研究紀要. 人文科学・自然科学篇*, 50, 1-17.
- 遠藤架児 (2010). 労働者のストレスの男女差から探る働く女性のストレス構造について. *臨床心理学研究*, (8), 77-91.
- 遠藤久美・橋本幸 (1998). 性役割同一性が青年期の自己実現におよぼす影響について. *教育心理学研究*, 46, 86-94.
- 福丸由佳 (2000). 共働き世帯の夫婦における多重役割と抑うつ度との関連. *家族心理学研究*, 14(2), 151-162.
- 福富 護 (1983) . 性の発達心理学, 福村出版, 22.
- 古川壽亮・鈴木ありさ・斉藤由美・濱中淑彦(1993). CISS (Coping Inventory for Stressful Situations) 日本語版の信頼性と妥当性 : 対処行動の比較文化研究への一寄与 *精神神経学雑誌* 95(8), 602-621.
- 橋本剛 (1997). 対人関係が精神的健康に及ぼす影響-対人ストレス生起過程因果モデルの観点から. *実験社会心理学研究*, 37(1), 50-64.
- Hall, D.T. (1972). A model of coping with role conflict : The role behavior of college educated women *Administrative Science quarterly*, 17, 471-486.

- 濱田維子 (2005). 仕事と家庭の多重役割が母親の意識に及ぼす影響, 日本赤十字九州国際看護大学, 3, 147-158.
- Hammer, L,B, Allen,E & Grigsby,T,D. (1997). Work-family conflict in dual-career couples : Within individual and crossover effects of work and family. *Journal of Vocational Behavior*, 50 ,185-203.
- 林峻一郎 (1992). 日常生活ストレスと心理的対処行動の対応する 2 種のパターン-心身症・神経症・うつ病と健常条件-社会精神医学, 15, 65-76.
- 林真一郎 (1999). 「男らしさ」とメンタルヘルス -男性の男性役割に対する態度と不安・抑うつ・感情制御・自尊感情との関係-, 日本=性研究会議 ,11(1),2-12.
- 林真一郎 (2002). 男性役割規範尺度日本語版 (JMRNI) の作成, 上智大学心理学年報,26, 135-144.
- Helgson,V,S. (1993). Implication of agency and communion for patient and spouse adjustment to a first coronary event *Journal of Personality and Social psychology*, 64 (5), 807-816.
- Higgins, G.,Duxbury,L.,E.,&Johnson,K.L. (2000). Parttime work for women: Does it really help balance work and family? *Human Resource Management*, 39, 17-32.
- Hirokawa, K & Dohi ,I.(2007)..Agency and communion related to mental health in Japanese young adults *Sex Roles*, 56, 517-524.
- 日下部典子・千田若菜・陳峻文・松本明生・筒井順子・尾崎健一・伊藤拓・中村菜々子・三浦 正江・鈴木 伸一・坂野 雄二 (2000). コーピング尺度の開発とその信頼性の検討に関する展望 *ヒューマンサイエンスリサーチ*, 9, 313-328.
- 平島奈津 (1997). 働く女性のストレスとコーピング. *労働の科学*,52(12) 749-752.
- 平田伸子 (2006). ジェンダー観からみた働く女性の周経期の健康. *久留米医学会雑誌*,69(1), 47-62.
- 平田祐子 (2010). コーピングタイプと精神的健康との関係に関する研究の動向 : 社会福祉実践への応用に向けて *Human Welfare : HW*, 2(1), 5-16.
- 平田伸子・平野(小原)裕子・加未恒壽・豊増功次 (2004). 働く女性の「ジェンダー・ストレス」要因に関する数量的分析,九州大学医学部保健学科紀要, 4, 57-66.
- 廣瀬空美 (2006). ジェンダーとストレスに関する心理学的研究 *ふくろう出版*
- Holahan CJ. Moos RH. (1987)Personal and contextual determinants of coping straregies. *J Personal Soc Psychol* ,52, 946-955.
- 星野寛美 (2004). 働く女性の健康問題 働く女性専門外来の診察によって見えてきたもの. *日本職業・災害医学会会誌*,52,66.

- 彭潤希・佐藤龍三郎・福渡 靖 (2001). 未婚女性の結婚・出産・育児・介護および就業に関する意識 とくに女性の家庭内役割と結婚意識の関連, 厚生指標 48(1), 26-32.
- 井上まり子・矢野栄 (2010). 非正規雇用に関連したメンタルヘルス不調とその防止対策 産業ストレス研究,17,199-205.
- 井上知子 (1975). 性役割の発達に関する最近の研究,心理学評論,18 (1) 1-13.
- 伊藤裕子 (1978). 性役割の評価に関する研究.教育心理学研究,26(1),1-11.
- 伊藤裕子・秋津慶子 (1983). 青年期における性役割観および性役割期待の認知.教育心理学研究 ,31, 146-151.
- 伊藤裕子 (1986). 性役割特性語の意味構造 : 性役割測定尺度(ISRS)作成の試み 教育心理学研究, 34(2), 168-174.
- 伊藤裕子・相良 順子・池田 政子 (2006). 多重役割に従事する子育て期夫婦の関係満足度と心理的健康 一妻の就業形態による比較一聖徳大学研究紀要,第一分冊, 人文学部 ,17, 33-40.
- 伊藤裕子 (2001). 青年期における性役割観の形成,風間書房,13.
- 柏木恵子 (1974). 青年期における性役割の認知(III) 女子学生青年を中心として,教育心理学研究, 22(4) ,205-215.
- 神村栄一・海老原 由香・佐藤 健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1995). 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度(TAC-24)の作成教育相談研究 ,33, 41-47.
- 加茂 登志子 (2004). ライフサイクルにおける「女性であること」 精神神経学雑誌,106(2), 208-212.
- 金井篤子 (2006). 増加する働く女性のワーク・ストレス 女性労働研究 (50), 67-79.
- 金井篤子 (2002). ワーク・ファミリー・コンフリクトの規定因とメンタルヘルスの影響に関する心理的プロセスの検討 業・組織心理学研究, 15(2), 107-122.
- 柏木恵子 (1974). 青年期における性役割の認知(III): 女子学生青年を中心として, 教育心理学研究, 22(4) ,205-215.
- 加藤司・今田寛 (2001). ストレス・コーピングの概念,人文論究,51(3),37-53.
- 加藤容子 (2002). 共働き女性のワーク・ファミリー・コンフリクトへの対処 : 夫婦の関係性の観点から,産業・組織心理学研究 ,15(2), 107-122.
- 加藤司 (2009). 日本語文献におけるコーピング尺度の使用状況-1990年から2008年-,現代社会研究 (7), 25-37.
- Kessler .R.C, (2000). Gender differences in major depression. In Frank E ed, Gender and Its Effect on Psychopathology, American Psychiatric Press, Washington DC ,61-84.
- 北原照代 (2007). 現代の女性労働と健康「労働と医学」,93,86-100.

- 小林 章雄(2001). 職業性ストレスと労働者の健康,日本労働研究雑誌,43(7), 4-13,88.
- 小泉智恵(1997). 仕事と家庭の多重役割が心理的側面に及ぼす影響:展望. 母子研究,18,42-59.
- 国立社会保障・人口問題研究所(2000). 第2回全国家庭動向調査 <http://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/Nsfj2/chapter43.html>(2010年6月4日 閲覧).
- 小坂千秋・柏木恵子(2007). 育児期女性の就労継続・退職を規定する要因, 発達心理学研究,18(1),54-54.
- 小杉正太郎(2007). ストレスと健康の心理学,朝倉書店,ストレスと健康,1-10.
- 小杉正太郎(1998). コーピングの操作による行動理論的職場カウンセリングの試み,産業ストレス研究, 5, 91-98.
- 小杉正太郎(2002). ストレス心理学:個人差のプロセスとコーピング 川島書店
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局(2004). 平成16年版 働く女性の実情 <http://www.hakusyo.mhlw.go.jp/wpdocs/hpwj200401/body.html>. (2010年6月4日 閲覧).
- 厚生労働省(2007). 平成19年労働者健康状況調査 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/saigai/enzen/kenkou07/index.html> (2010年6月4日 閲覧).
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局(2009). 平成21年版 働く女性の実情 <http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/josei-jitsujo/09.html>. (2010年6月4日 閲覧).
- 厚生労働省(2010). 平成22年賃金構造基本統計調査 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/chingin/kouzou/z2010/index.html>. (2010年6月4日 閲覧).
- Lazarus R,S & Folkman,S.(1984). *Sress,appraisal and coping*. New York: Springer. (ラザルス R.S & フォルクマン S. 本明 寛・春木 豊・織田 正美(監修)(1991). ストレスの心理学:認知的と対処の研究 実務教育出版)
- 松田茂樹(2005). 育児期の共働き夫婦のワーク・ライフ・バランス ,Life design report (通号 168), 16-23.
- 松井真一(2010). 女性のケア意識と家事負担満足感—伝統的性役割意識とケア意識の違いに関する実証的検討—,立命館産業社会論集,第45巻第4号,105-121.
- 松浦素子・菅原 ますみ・酒井 厚・眞榮城 和美・ 田中麻未・天羽幸子・詫摩武俊 (2008). 成人期女性のワーク・ファミリー・コンフリクトと精神的健康との関連 - パーソナリティの調節効果の観点から -, パソナリティ研究, 16(2), 149-158.